章炳麟『訄書』の知識人論（一）
「雑志」から「別録甲」まで　訳解と議論

Argument about Chinese Intellectuals in *Qiushu* by Zhang Binglin (1)
Translation, Interpretation and Discussion from Zazhi to Bielujia

福島　仁
Hitoshi FUKUSHIMA

はしがき

『訄書』の終わりの三篇は、学隠篇とつながりをもち、歴史上の知識人を論じて清末の知識人のあり方を問題とする。

『訄書』哀清史篇に中国通史目録（以下、目録と略称）があり、「別録」に挙げられた人物がここでも議論の主題となったり、少なくとも言及されている。別録甲篇の三人と別録乙篇の五人は目録中に示された個人と同一である。両篇は章炳麟が構想していた中国通史の一部を占めていたと考えられる。さらに雑志篇で言及のある数人も目録中にみえている。これらは章氏の構想で予定された論点がかいま見えているのだと思われる。つまり完成をみなかった章氏の中国通史は『訄書』でもって一端を窺い知ることができるし、通史の構想が『訄書』にも反映していると言えるのではないだろうか。

哀清史篇の目録はほぼおなじものが『新民叢報』第13号に「章太炎来簡　壬寅六月」として掲載され、これがより早い。日付は1902年7月に当たる。梁啓超もこのころ中国通史の構想を同誌に発表していた。梁氏の「中国史叙論」「新史学」はその準備であったとされる（『梁啓超年譜長篇』309頁）。この書簡の中で梁氏の「東籍月旦」にふれているし、章氏は1902年2月まで、当時横浜にあった新民叢報社の二階に滞在していたから、梁氏とは頻繁に意見交

換していて、帰国後に独自の考えを書簡にこめて送ったのである。文中に「俟商」とあるのはもっぱら梁氏との協議を待つ、ことを意味するのであろう。この書簡はおそらく後の哀清史篇の中国通史略例とともに構想を詳しく述べているから部分訳し検討を加えておく。

「私の考えでは、今歴史を書く場合には、一王朝のみを対象とするなら、新しい理論を明らかにするのは難しいだけでなく、事実も詳しく調査するすべもありません。通史というのは昔から現在まで通貫するのであって人物を評価し史実を叙述するのが第一とする必要はありません。「典志」に重点を置くようになると、心理学、社会学、宗教学などの学問をみなそこに注入できるでしょう。「典志」に新しい理論や新説があるとは、もとより『文献通考』や『会要』等の書物がただあらゆるものをつなぎあわせて議論するのとは方向を異にするし、鄭漁仲の『通志』のように自分中心、独断の欠陥に陥ることにもなりません。けれど、通史が重んじるのは二つの面です。一方は社会、政治の進化と衰退の原理を明らかにするのを中心とし、「典志」で表現します。一方は民の気力を奮い立たせ後輩たちを啓蒙し導くのを中心とし、伝記で表現することが必要です。四千年の間に何百という帝王、何千という宰相で人々に知られている者はいちいち数え上げるわけにもいきません。通史には独自の構成があるべきで、一人一人その経歴を解明するべきではないのです。それで、君主、宰相、学者はすべて図表を作り、伝記は今日の社会に利害関係が影響を与える者だけを取り上げ、何篇かを著述することとします。さらに歴代の社会の重要事件で時代を通貫するのが困難な場合、袁機仲の『紀事本末』の例に倣って記を作成します。」

ここでは中国通史における五分類の特性を明示しているが、「別録」は現代に影響が及ぶ個人の伝記になる。『旭書』に取り上げられた人物は負の評価を下されることが多く、その場合は憤怒に

より奮い立たせる効果が求められたのであろう。しかし、朱子の『通鑑綱目』で「莽大夫揚雄死」と酷評された揚雄はあらがい得ない時勢に迫られた処世の一類型として検討される。別録甲篇の三人は世間的評価とは違う論述がみられ、章炳麟の知識人論の独自性が発揮されている。

上記引用および目録は『訄書』の構成理解にも有益である。実際、『訄書』の全体構成について章炳麟の明言はないからである。一例をあげる。この書簡では「志」、哀清史篇の目録では「典」とされている「典志」は人文社会科学を手段とした社会変化の科学的研究を目標としている。『訄書』の序種姓上篇は白河次郎、国府種徳『支那文明史』に紹介された漢民族の西方起源説に基ずくのだが、これこそ「新理新説」を展開したと言える。引用部分の後に書簡では日本人の中国史を簡略で内容なし、と切り捨てながら、文明史だけは人種の区別に関する特異な見解がある、と触れるのはそのことを示す。目録の「種族典」が書かれていれば内容は序種姓上篇と重なり、逆に序種姓上篇は書簡の著述方針に沿ったものであろう。『訄書』の中国思想論も目録の「学術典」とかさなり、同様に人文社会科学による新理新説を求めたものだと再認識できそうである。

もちろん中国通史と『訄書』とが構想において完全には一致しているはずがないが、『訄書』改訂の基本方針とは同一と言えるのではないか。西欧と日本の人文社会科学を応用した新理新説の追求と中国社会進化の解明、かたや漢民族の精神を奮起させるための民族主義的言論である。雑志篇、別録甲、乙篇ではもっぱら後者が展開されている。

これまでの訳解を補足しておきたい。張暁編『近代漢訳西学書目提要』（北京大学出版社、2012年）によると、蟹江義丸の『西洋哲学史』は1903年に范迪吉訳で上海の会文学社から出版されている（同書4頁、0026番）。ただし、これを含む「普通百科全書」は

1903年に一度にあまりにも数多く同社から出版されていて、実際に出されたかどうかは確認できていない。遠藤隆吉『支那哲学史』、白河次郎、国府種徳『支那文明史』も漢訳されている。章炳麟が日本の原書から自ら訳して引用しているのか、漢訳書から引用しているのかは不明であり、後考を待つ。今回は紙幅の都合で議論は行わず、次回にまとめたい。

尚書

雑志　第六十

(1)　管仲は僭越にも彫り細工を施した簋を使い、朱色の冠ひもをつけ、さらに三人の妻の家をもっていた。仲尼は、この人がいなかったなら、私は夷狄に支配されているだろう、と語った。兄嫁と通じた叔術でさえ彼の過ちを消し去ろうとする者がいた。私が近世の李光地に関わる事をみると、全くそれとは反対である。鄭成功は明の正朔を奉じることで、自らは共和に倣おうとしていたし、「弁髪の蛮族」を敵とすると言い、他人は彼を「海島の夷族」とした。施琅などの降臣を光地は逃げ出したことをきっかけに重用し、ついには鄭一族を打ち倒した。明の礼俗と正朔はこれによって断絶したのである。彼の功績はなんと大きい事よ。全紹衣は振り返って、服喪に違反し、友人を裏切り、他人の妻を奪った罪を告発している。功名は明らかに記録されているのに、三つの過失だけを罪とするのは全く瑣末ではないか。なんとしたことだ。後世の光地を評価する者が管仲や叔術と結局違いはないとしたなら、紹衣の批判すら余りにひどすぎることになる。

【解】「管仲鏤簋朱紘」は徐注と違う典拠をあげておくと『礼記』礼器篇にそのまま見える。

「三帰之家」は『戦国策』東周にある。斉の桓公が宮中に多くの女性を囲って、国人が非難したとき、管仲がわざと三人の

妻をもち、桓公の過ちを隠そうとした、という。

「叔術」については、徐注にも示すとおり『公羊伝』昭公31年の伝にみえる。邾婁の顔公が周の天子に罪され、顔夫人は顔公を殺害する訴えをした者を殺したなら、その妻になると宣言した。顔公の弟、叔術はそのとおり実行して、夫人を妻とし国君となった。その後、実子ではなく、顔公と夫人との子に国を譲った。公扈子は兄嫁を妻とした叔術を弁護した。管仲にしろ叔術にしろ過失はあったが大きな功績があり、孔子と公扈子とが弁護していることを言っている。

「共和」は『史記』周本紀に召公と周公が宣王を即位させ摂政として補佐したことに倣ったというのであろうか。孔子紀年に対し章氏は共和年を使う。

「索虜」と「島夷」を対言するのは『資治通鑑』巻69に司馬光の論があり、「宋と魏以後は南北が分割統治され、それぞれに国史があり、相互に排斥しあって、南は北を索虜とし、北は南を島夷とした」と述べる。『宋書』には索虜伝があって、北魏の皇帝をおさめ、『魏書』では南朝の諸帝には「島夷」をかぶせている。鄭成功は清との間で南北朝の形勢を構えた、というのであろう。

全祖望の『鮚埼亭集外編』巻44「答諸生問榕村学術帖子」に李光地の評論があり、三つの過失に触れている。しかし、最後のものは外でできた子供を後継ぎとしたこととする。全氏は皮肉をきかせてわりと冷静に批判していて攻撃しているとはいえない。章炳麟の方が別録乙篇でより具体的に譴責を加えている。

(2) 宋の紹興三十二年、辛棄疾は耿京の指令を受けて、中原の義勇軍を率い宋に帰順した。そのとき棄疾は二十三歳。彼は金の治世に生まれ、言うところの、その土地に住み、その作物を食

べながら、反逆を起して反対に攻撃した。寄る辺のない暮らしをおくっていたので、反逆することとなったのか。それとも異民族とともに居住することにより、普通より正義の気持ちが確固としていたのだろうか。世間では棄疾は党懐英と易占を行い、違う卦が出たのでそれで南の宋に仕えるか北の金に仕えるかを決めた、と伝えられている。ああ、干からびた甲骨やめどぎの占いの不思議な働きも人間を超越するものではない。不思議な働きが必ずあり、天は反逆を助けはしないが、人の問いに打てば響くように応答する、のだ。

【解】『宋史』巻401辛棄疾伝によると易占で党懐英が得たのは坎卦である。彖伝に「重険也。行険而不失信」と説かれ、険阻が重なる中にありつつ信を失わない、というのは金に留まることになる。辛棄疾は離卦を得たが、彖伝に「離麗也。日月麗乎天。百穀草木麗乎土」とあり、本来の場所に附く、と説いているので、金を離れ附くべき宋に帰順することになる。

(3) 曾国藩を賞賛する場合は「聖賢宰相」となり、非難する場合は「大悪党」となる。彼の天性を追求すると、功名を求める変節の人である。当初は翰林院ではでしく詩作と書道を事として弟たちを喜ばせた。名士公卿と交際するようになると名誉をほしがり、得意げに文章を作ることによって道の真実を隠した。金陵における事業は、何度も危難を経て武功を成し遂げたのだし、多くの司令官たちが左右で助力したのであり、深い安定した根拠をすえて行動を起こし、大事業を成したのではない。目的はあくまで最高爵位と紫光閣に肖像を掲げる名誉にあった。戦闘が終結してからは、国家的危機の対処を献策することはなく、本当に清の皇室の家柄だけに忠実だったこともないのではないか。唐代の王鐸や鄭畋の人々に比べられよう。世間では曾国藩が生まれた時に、祖父はみずちが柱に巻き付いている

のを夢に見た、だから一生涯蛇のうろこのような疥癬を患ったのはその実証であると伝えられている。一般的に功績を挙げ栄誉を得た者は必ず世俗で神秘怪異な現象が伝わる。唐代の人が、鄭畋は死んだ母親の胎内から出生したと言う。南唐の尉遲偓の『中朝故事』に見える。みな似たようなでたらめである。死後三十年、孫の曽広鈞は「わが祖父は民衆の奸賊だ」と言う。悲しいかな、孝心あつき子孫ですら後代にわたり改められないのである。

【解】「金陵之挙」は太平天国天京の攻略を指す。

王鐸も鄭畋も黄巣の乱のとき唐の王朝を救った官僚であり、王は鄭の後任であったこともある。王はともかく鄭畋は危機への対処を何度も献策しているから、ここの文脈とはずれている。下文の鄭畋が死んだ母から生まれた故事は旧、新『唐書』には当然見られない。『中朝故事』の『四庫提要』では唐の『斉推女伝』に名前だけがちがう同じ逸話があり全くの踏襲であると指摘する。

曽広鈞（1866-1929）は曽国藩の長孫であり民国では清史館に入った。発言の出所は未詳。

(4) 後唐の明宗は夜中に天に祈り「私はもともと野蛮人であり、いったい天下を治められるだろうか」と言った。ああ、立派な徳行を行い、隠公よりも賢明であり、務光とちがいはそれほどなかった。残念なことに建国の正統性に関する根本を知らなかった。喪礼において後継ぎは無くとも、喪主がいないことはありえない。一族がすべて絶えてしまった場合は、村長が主どる。『易』では「たくさんの龍がいて頭に立つものがない」「戦って玄黄の血が流れる」と言う。素王が出現してからは、中華においてはそういう心配はないと私にはわかる。王者は次々と交代するが、孔子の家系は代々失われることがないから、君主がいないときには、褒成侯の後裔が村長となる。野蛮人が我が統

治権力を盗みとることがあるとしても、まさしく共主をどうこうすることはできないのではないか。明宗はそれがわからなかったので、祭天の儀礼を行っていたのは、道理を知らなかったのだろう。けれども、仁を追い求めるなら悪はない、である。さらに賢者を推戴したなら、あるべき秩序が失われなかったのではないか。

【解】後唐明宗の語は『五代史記』巻六、唐本紀にある。続けて「世が乱れて久しい。どうか天が早く聖人を生むように」と祈った。

務光は『荘子』譲王篇に、湯王から王位を譲られても受けず、川に投身したと記されている。一方、大宗師篇に付けられた成玄英の疏では黄帝の時の人、とも言う。ここは明宗が帝位に執着しなかったことを形容している。

『易』の乾卦用九の爻辞は文脈から考えると、リーダーがいない状態ととるべきなので、諸解の中で『周易程氏伝』に基づいていると考えられる。

「九鼎」は『左伝』桓公二年の伝によれば、夏から受け継いだ天子の宝器であり、周の武王が殷に勝利した時、殷から奪って洛邑に移した。

(5) 女性君主、盗人君主、十国、八バイルは耳にするが、何年も君主がいないというのは聞いたこともない。元の定宗が没して三年間空位のまま、君位に就こうという者はいなかった。『元史・定宗本紀』「三年戊申、春三月、皇帝はハンシヤルの地で崩御された」の後に「己酉年」「庚戌年」と記され、これに続けて「定宗が崩御した後、皇帝擁立を議論したが、決定しなかった。その当時すでに三年のあいだ君主がいなかったのだ。詳細な事実は資料に記録がないから調べようがない。」と繋いでいる。この時に中原の人民は誰に服属していたのか。元は百年間君主がいたというならば、一時的に三年間いなくても、人民は元に服属していたのである。ああ、中華に君主

がいたのが四千年間になるとすると、二百年しばらく君主がいないとしても、人民はまだ中華に服属している。

【解】「八貝勒」は清太宗のときに八和碩貝勒があり、これを指すか。『清史稿』巻二、太宗本紀、天聰十年二月条を参照。バイルは満州、蒙古貴族の爵号である。

『元史』の引用は「三年」から始まるので括弧に含めた。「定宗崩後」以下の引用も「無従考也」までであるから、小字部分の終りまで括弧に含めた。徐注、全集ともに誤り。

「杭錫雅爾」は百衲本二十四史の洪武刊本『元史』では「横相乙兒」に作る。同一地名の異なる音訳である。章炳麟は百衲本以外のテキストか、あるいは『元史』改修の書籍に依っているのだろう。定宗すなわちグユク汗の没した地点については『中国歴史地図集』第七冊「嶺北行省」に横相乙兒が表示されている。現在の新疆青河県のウルングル川とブルグン川に囲われた土地とされる。驚くことに、西域游（www.xiyuyou.com）「阿爾泰山中神秘的百堆大墓」というブログによると、まさしくこの土地にグユク汗の墓があり、映像が掲載されている。

(6) 儒生は驪山で生き埋めにされたが、伏生と叔孫生だけが逃れた。秦が滅亡したのち漢王朝で出世し地位を得た。これは節義に外れたのだろうか。それ以前に夏の太史令の終古と紂王受の臣下である向摯がいた。後に続いて陸元朗と孔仲遠がいる。そもそも自ら一身をもって礼楽と儒教を守り、汚辱に陥ることを怖れない、これこそ水路で自殺するちっぽけなまことでは及びもつかないのである。自らは守れないにしても、幸いに徳と智を備えた隠棲の民がいて正しき道を守る。さらに世間がその人を追い立てるなら、汚辱を怖れず、その人を守る。たとえば馮道や銭謙益などが尽力したではないか。そうしないと、革命の時に、選良が捕縛され、谷間で命を失い、この世界の綱紀が絶

たれてしまう。孔子は「師摯が音楽を始めたころ、關雎の音楽は乱れていたが、それを治めて美しい音色が耳に満ちた」と言っている。

【解】「伏生」以下の六人は皆、王朝をまたいで出仕し、文典を後代に伝えた

『論語』泰伯篇、第15章をあげているが、この章自体、解釈が様々であって、章炳麟が何を意味しようとしたのかわかりにくい。徐注に引く鄭玄の説に従えば、孔子は混乱や汚辱の中で礼楽学術を守る知識人の働きを評価した、と解される。

(7) 誰が火炙りの刑に値する男を官位につけたのか。魏の太子が「主君と父親がどちらも重い病気にかかり、ちょうど丸薬が一つだけあるとしたら、どちらを救うのか」と問うと、邴原が怒って「父親です」と言った。これを考えると、息子と父親との関係は主君と比べるとどちらが重大なのか。目上だけでなく目下も同じだ。だから王莽が息子の王宇を殺害したことを逢萌が耳にし「三綱が断絶した」と嘆いた。心痛から死亡に至るほどに、おいおいと泣き叫んでこう言ったのは、かくまで悲痛な悲しみが深かったのだ。断絶したことがわかっていれば、断絶してはいない。孫復、胡安国から今まで、主君を重視し、生んでくれた方は軽視したため、それが申胥もどきの数を増やし、かつ嵇紹のような者たちがたびたび望みを遂げることをもたらした。断絶したのだろうか。本当に断絶してしまったのだ。

【解】「焚如」は『易』離卦九四から、「鞶帯」は訟卦上九から由来し、権臣が強引に位を奪い、不安定になることの象徴であり、ここは王莽を指すのであろう。

王莽が長子の王宇を殺害する事情は『漢書』巻99王莽伝がより詳しい。

逢萌の発言は『後漢書』巻83「逸民列伝」にあるが、逢萌

は心痛で死亡はせず、後漢になっても天寿を全うしている。

「申胥隠軫」の申胥は『史記』巻66にみえるかの伍子胥であり、楚の平王に父と兄とを殺害され、仇を討つために呉に仕えて、楚を攻略した。「隠軫」は殷軫、即ち盛んな様を言う。徐注は曲解している。忠君の強調が過ぎて無原則、一律に押しつけることで形骸化、固定化が起こり、個人の怨恨がもとで生国を裏切り、仕えた呉には忠誠を尽くす伍子胥の類が出てくるし、一方では嵇紹のように主君の人物がどうであれ身を犠牲にする盲目的忠誠が現れる。状況を熟考したうえで三綱の原則を発揮すると章氏は言いたいのではないか。

別録甲　第六十一　楊雄、顔之推、銭謙益について

(1)　章炳麟は言う。墓の跡に行くと足音を聞いてももの悲しい。だから、箕子は殷墟を通ったとき美しく詠じたし、魏の武帝は荒れはてた関東を見て「千里にわたって鶏の鳴き声がない」と賦した。王朝が交代する小規模な変化であっても視るに忍びないほど悲痛であるから、王都の周りを捧げて異民族に渡した者であればなおさらそうであろう。高貴な人が朝廷にあっても権力を持たなかったり、高い地位を占めていても王朝交替に出くわせば、なりゆきに従い移り行き、その際には行いは色々だが、故国を懐かしむ気持ちを当然抑えられず、悲憤を文章に表すことも至る所でみられる。国の宝物を受け渡す相手がまさしく同類の漢民族であれば中華には全く損失がないのだが、しかし、結局は恨み慕う気持ちを平静に保つことができないのは深い思いがあるからである。

【解】「逃空虚」は『荘子』徐無鬼篇に「逃虚空」とあるのに基ずくのだが、注家によって解釈が違う。章炳麟の以下の文脈にそうと、司馬彪注の「虚空とは元の壊れた墓が空っぽになったこと」という解釈が当てはまると考えた。

(2) 楊雄は子雲という字で成都の人である。若年から学問好きであったが、経書解釈は行わなかった。簡素で物事にとらわれない人柄で、吃音であり弁論が得意でなかったので、寡黙で奥深い思索を好み、品行方正で世の中に名声を求めることはしなかった。家の財産が十金にもならず、わずかな穀物の蓄えもなかったが、悠然と構えていた。本来、度量が大きく、聖賢の書物でなければ読もうとしなかったし、意に沿わないので富や地位にはこだわらなかった。ただ詩賦を好み、『反離騒』『甘泉』『河東』『羽獵』『長楊』の諸篇を書いた。漢の成帝、哀帝年間に出仕し、丁氏、傅氏、董賢が権勢を振るい、彼らにつき従うものが俸給二千石まで出世した。ところが雄はちょうど『太玄経』を執筆中であり、地位は黄門郎にすぎなかった。郎官は職掌がなく千人の数があり、印綬を持たず勅任官ではなかった。侍郎は比四百石の俸給であり、大きな県の県丞、県尉にも及ばない。漢代の俸給は非常に低く、それは現在の挙人や貢士であり館職につき仕事をするものと違いはない。『百官公卿表』郎と期門、羽林とはみな光禄勲に下属する、郎は門の守護が職掌であり、外では車馬を担当する。期門は武装して送迎するのが職掌であり、郎に次ぎ、定員はなく、元始元年に虎賁郎と名称が変わった。羽林は送迎を職掌とし、期門に次ぎ、はじめは建章営騎といい、後に羽林騎と名称が変わった。つまり郎の地位は低く下等の騎士である。だから、旧い主君から離れ新たな主君に仕えても二心があったのではない。

【解】この節の前半は『漢書』巻87上の揚雄伝の表現をそのまま用いている。あげられた諸賦はそこにある。

楊雄の姓を揚とするか楊とするかについては徐注の示す段玉裁、王念孫の論証は未詳である。『説文通訓定声』の揚字の解に「反離騒」自序で「世系は『左伝』にみえる楊食我の後裔のはずだ」と言っているから楊だとわかる、としている。ここでは『漢書』その他に関わるときは揚を、章炳麟の記述に関わる

ときは楊を用いる。

「挙貢入館」とは挙人や貢士のまま殿試を経ずに国史館や、清初であれば明史館、四庫全書館に入る、制科であろう。

『漢書』の百官公卿表の記述を大幅に編集して掲げている。小字部分の最後は章炳麟の見解であろう。

(3) 王莽が漢にとって代わり新の皇帝になると、老年で勤続年の順番で大夫になった。かつて『劇秦美新』を書いて献上し、うわべは符命を示しつつ、内実は秦の滅亡を使って風刺した。その当時、王莽は羲和の官を置いたのだが、雄は『法言』を著し、羲和を重黎になぞらえ、ついで呪術師が足を引きずる歩みをとらえてこの官が偽りを生み出していることを明らかにした。王莽の体制の変革と復古を研究すると、当時の民衆は暴政に耐えられなかったが、しかし、結局は光武帝、明帝、章帝の政治の導きとなり、滅亡した秦が残した害毒を消し去る方針は後漢になってやっと効果が現れた。雄の見識は狭く、しばしば非難されたが、しかし、彼の根幹は漢から新への革命にこそあった。だから、漢朝が興り二百十年で最も隆盛に至った、と言ったのは、命運はまだ半ばにあり、やがて中興を迎え、旧来の文物を復活させることを表明したのだ。さらに二人の龔氏の清廉を激賞し、自らを蜀の荘遵の沈黙にたとえている。悲しいかな、その言辞は力なく微弱である。雄は天鳳五年に没した。

【解】「転為大夫」とは王莽が設置した中散大夫となったのである。「劇秦美新」の序にみえる。

『劇秦美新』は宋代の曾鞏、孫復、王安石以来、揚雄の作ではないと疑われてきた。清の費密は『漢書』揚雄伝などの記述をみれば揚の自作ではないのが自明であると言う。章炳麟は自作と考えている。銭穆「劉向歆父子年譜」元始三年条では費密の議論を紹介した上で自作だとし、だとしても揚雄が王莽に追

従したという不名誉にはならないと考えている。

「符命」は天からのしるしであり、『漢書』王莽伝によると漢平帝の元始五年に白石に丹書したものが最初であり、居摂三年に三例が出て、王莽はそれを活用して帝位についた。これは比較的知られているので訳さなかった。

「莽置羲和」とは、『漢書』平帝紀の元始元年二月に羲和の官を置き、教化を広め、淫祠を禁じ、鄭声を放つとした。つまり文化統制官僚であってかの劉歆が就いた。

「以羲和擬重黎」とは、徐注に示すように『法言』重黎篇には重が天を、黎が地を司り、区分を明確に示した。重黎は経書では『尚書』呂刑篇にあり、皇帝が「乃命重黎。絶天地通」となっていて、人と神との分限を分けたことになる。つまり、羲和が天の分限を守らず、人間界の政治にまで神霊的作為を使って働きかけることを揚雄は暗示したのだと章炳麟は考えた。

「藉巫步以明其讎偽」について。『法言』重黎篇では禹が足を引きずるのを巫祝がまねたとは虚偽を行う者が真正なる者をまねることを言ったのだとする。『法言』の李軌注は「すべて不正であると言う。ここに来て書物を置いて慨嘆して曰く、揚子の議論はなんと深遠であろうか。王莽が羲和の官を置いたことについて、上の章で暗に重黎の問いを発言し、この文では真偽の区分を明言した」と総括した。つまり、羲和は王莽のため虚偽を行う官であり、新は遠からず衰えて漢が復興に向かうことを揚雄は極めて控えめに発言したと考えられる。

「両龔之絜」は『法言』問明篇に「楚の両龔はまことに清らか」と評された。『漢書』巻72では二人は友人だったと記されている。

「自比於蜀莊沈冥」の莊は莊遵であり『漢書』巻72では厳君平として現れ、揚雄の師である。『法言』問明篇では「私が莊を珍重するのは人から攻撃されないところに居たからである」

と言うのは自分の処世と同じだとしたのだろう。

(4) 桓譚という相県の人がいて、字は君山、楊雄とは親しい友人であり、新に仕えて掌楽大夫になった。光武年間に議郎となり、六安郡丞にまでなった。当時、新の宮廷の旧臣たちは競ってもとの主君を侮辱しそのさまはあまりに醜悪だった。しかし、譚は『新論』を書き世祖に献上しており、なお王莽を「王老人」と呼んだ。古くは、高祖がもとの楚の家臣に項籍の名を呼ぶよう命じたが、その時、鄭君という人がいて、一人だけ従わず、そこで命に従い籍の諱を言ったものはみな大夫になったが、鄭君は追放された。譚などは彼に次ぐであろう。

【解】「六安郡」について。前漢は六安国が置かれ、後漢の建武13年に廃止され県となり、廬江郡に下属した。つまり桓譚の没年直前には郡ではなかったから、桓譚が郡丞になりえるはずがない。『後漢書』巻28上の桓譚伝でも「六安郡丞」となっている。後漢の歴史編纂の複雑な経緯から、混乱した記述となったか。

鄭君の史実は『史記』巻120、鄭當時伝に見える。『史記集解』によると鄭當時の父親である。

(5) 彼の行いは楊雄とは反対である。つまり、同じく中国の地にあるなら、それぞれ主君が別であっても障害はない。元代の閔本、黄尋、鄭玉、趙弘毅の連中などは文学により俸給を得ていたか、または仕官する意欲を捨てて詔聘を受け入れなかった。明の軍隊が徽州を攻略したり、首都に侵入して、夷狄の元を撃滅し、天下が蘇ろうとしているまさにそのときに、婦人と子供をひきつれて首吊り自殺した。これはいわゆる道徳と自然に背き、教えに依りながらそれに逆らうものではないか。

【解】閔本以下四名はみな『元史』巻196忠義伝にみえ、漢人で

ありながら、元に忠節を尽くし殉じた。閔本が吏部尚書等の高官であったのをはじめとして官職についていて、京師に明兵が至った時に自殺した。鄭玉だけは出仕しなかった。徽州に明兵が来たとき自殺したのも鄭玉である。注目すべきは、官位が低いからと止めたのに趙弘毅の息子であった趙恭が「昔の忠義は人それぞれが真心を尽くしたのであり、官職の尊卑を問うことがあろうか」と言い、元に殉じたことである。これは揚雄が官位が低いから主君を変えても問題なし、とした章炳麟に対し鋭い反問を突きつけている。

「以訓則逆」は徐注に示された『孝経』聖治章の下文に「以順則逆。民無則焉」とあるのに倣っているのではないか。とすると、教えによって行うが、実際はそれに逆行することを意味するであろう。

(6) 顔之推、字は介、臨沂の人である。幅広く読書し、文章が上手だった。酒飲みでみなりを気にかけなかった。梁の元帝に仕え、散騎侍郎奏舎人事となった。周の軍隊が江陵を攻略すると弘農に行き、李遠の書記をつかさどった。之推は仇敵の国に仕えるのを望まず、黄河の増水に乗じて船を準備し、妻子を引きつれて斉に逃れ、砥柱の難所を通りぬけたが、当時の人は勇気ある決断を賞賛した。

【解】侯景の乱をへて梁の元帝が江陵で即位した後、554年に周の軍により江陵は陥落した。『北史』周本紀、西魏の恭帝元年条によると、捕虜になった士庶は十余万人が奴婢にされ長安に連行された。『北史』巻83、顔之推伝では周の大将軍、李穆が顔之推を重視して兄の李遠に送り、書翰を扱わせた、とある。

『北斉書』巻45の顔之推伝も同様であり、徐注のように官職につくのではなく、奴婢として使役されるはずだったと思われる。章炳麟は出仕するような記述である。顔之推は奴婢となる

のを嫌い逃亡したと考えた方が当たっている。

(7) 斉に仕え、官職を歴任して黄門侍郎に出世した。周の軍隊が斉に侵攻し晋陽を落とすと、後主は甲冑をつけず馬で逃走し、鄴に着いたが、国家の計略は全く窮まった。之推は陳氏の国が梁に由来し、中華の古い家柄であるから、もとの主君と違いはないと考えた。元帝が落命して以来、長江南岸はどんどん衰退したが、今こそ形勢の動きに従い、北斉を衛星国家とすることができたなら、外側に淮水、岱山、梁、宋の防衛線ができて、なんとか自立できる望みがある。そこで宦官の鄧長顒のつてで陳に逃れる策を上申し、さらに千人の呉の武士を募集して護衛とし、青州、徐州の道筋を通り、陳に向かおうとした。後主は承認したけれども、丞相であった高阿那肱がいやがりその計画は中止となった。

【解】この節はほぼ『北斉書』と『北史』の顔之推伝に依るけれども、顔之推が陳を根拠地とする計略は基ずくところがわからない。これは章炳麟の推測だろうか。

「計困甚」は徐注が言う生計が困窮したことではなく、国家の存続にまったく見込みが立たず策が尽きた事を指すのだろう。それは『北斉書』巻八、斉本紀の後主が鄴に逃げ帰ったあとの天統七年の記述をみればわかる。

「淮岱梁宋之蔽」の梁と宋は相宅篇の冒頭に大梁と宋があり(751頁)、同じものを指すと考えてよいだろうから、開封と商丘の周辺である。

(8) 斉が滅ぶと再び北周に入り、御史上士となった。隋の開皇年間に太子が文学に招請したが病気で死亡した。

(9) 之推が斉にいたとき、息子が二人あり、長子は思魯、次子は

敏楚といい、ルーツを忘れないことを示した。その『顔氏家訓』に記述がある。「斉国の一人の士人が前に私に語るには『僕には子供が一人いて、年はもう十七になり、とても文書の扱いが上手であり、鮮卑語と琵琶の演奏を教えて、もう少し理解を深め、高位者に仕えれば、きっとかわいがられる』。私はその時うつむいて言い返せなかった。この人の息子の教育は変だ。こんな学業によって高官に至るとしても、おまえたちには行ってほしくない。」顧炎武はこれを知って述べた。「おお、之推はやむを得ず乱世で出仕したけれど、なおこう発言したのは、『小宛』の詩人の考えをまだもっていたからだ。あのこそこそと今の世に媚びる者たちは恥ずべきではないか。」

【解】「伏事」は徐注に言う官職に就くのではなく、公卿の家僕となることを言うのだと考える。

顧炎武『日知録』では『顔氏家訓』のこの箇所を引用したうえで、自分の感想を付している。「小宛詩人之意」は徐注に引く「小宛」第三章の正しい道によって子を諄々と教育するということであろう。『顔氏家訓』のこの逸話は清末では注目されていたようであり、梁啓超の『自由書』（『飲冰室専集』第三冊、89頁）では「奴隷学」と題して英語、仏語及び西洋の学問の学習を当てはめている。

(10) 銭謙益、字は受之、常熟の人である。明に仕えて、清になっても再び尚書に進んだ。

【解】銭謙益のいくつかの伝記を見ても、清になってから尚書に任じられた記述はない。章炳麟は誤ったか。

(11) 古くは明の中頃、李夢陽、王世貞以来、難解で珍奇な言葉を生み出すのを求めることが高級だとし、秦、漢を模倣しながら中身の魂は欠けていることがその誤りであった。謙益は艾南英

とともに公開の場で議論し排斥し、学者たちはその流行になびいたけれども、そのスタイルはとても幅広くしまりがない。

【解】『明史』巻286の李夢陽伝では「弘治年間に宰相の李東陽が文化の権勢を握り、世間は一斉に模範とした。夢陽だけが虚弱だと非難し、文は秦、漢であるべし、詩は盛唐であるべし、と主唱した」とある。

『明史』巻288の艾南英伝では「はじめ王、李の学問が大いに流行し、世間で古文を議論する人たちがみな模範とした。その後、鐘、譚が出て変化した。銭謙益が文壇に名声を得ると、相互に鋭く攻撃した。南英はこれに同調し、全力を傾け王、李を排斥した」とされる。ここの李は李攀龍であろう。鐘は鐘惺、譚は譚元春であり文体は竟陵体と呼ばれた。明代は文学に流行が移り変わり、古文体から公安体、竟陵体とスタイルが変化した。銭謙益は古文派を批判し、公安派に近い主張をしたようである。

⑿ 謙益という人は名声を追い求めるし利権を死守する。江南はもとの東林党の人士が集中していて、自分は高官の地位にあって文学に長じていたため、彼らのリーダーとなり、自分でも喜びとした。鄭成功が以前に教えを受け、やがて艦隊を率いて南京に進攻すると、安徽南部の諸府はみな帰順した。謙益は杜甫の「秋興」詩に和して勝利の歌とし、さらに新たな天子が中興をなしたなら、自分はむしろに座り処分を待たねばならない、と言った。この時、南京の奪還は間近だと思われたが、なにもせずに帰順を待っていたところ成功は敗退してしまった。

【解】「偃臥」は仰向けに寝た状態だが、なにを言いたいのかよくわからない。

⒀ その二年後、呉三桂が雲南で最後の皇帝を殺害し、謙益はふ

たたび「秋興」詩に和して哀悼を表した。前後併せて和した数百章を『投筆集』に編集したが、中華の衰亡と夷狄の騒乱とを悲しみ、尽きせぬ悲哀がそこにはあったのである。康熙三年に没した。

【解】「後二年」とあるが、鄭成功が南京攻略に失敗して退却を始めたのが清の順治16年7月（1659）、永暦帝が昆明で殺されたのは康熙元年4月（1662）であるから二年十ヶ月の間隔がある。

『投筆集』は『牧斎雑著』（上海古籍出版社、2007年）に収める。「秋興」詩は「前後所和幾百章」と章炳麟は記しているが、104章であるから、「百幾章」の誤りかもしれない。確かに銭謙益の希望と絶望、彼の真心が現れている。

⑭　その前、明の滅亡にあたり、合肥の龔鼎孳、呉の呉偉業はどちらも降伏した旧臣であり、詩歌に長じ、しばしば憤激を表したが、偉業は言葉使いが特に意味深く、叙述は真実に近い。世間では謙益の作った詩は文筆で自分自身をつくろっただけで彼の本心ではない、と多くが思っている。人が故国を懐かしむことから言うと、降伏した臣下である陳名夏は大学士にまでなったが、彼ですら頭をなでながら髪を剃るべきではなかったと言った。この点から謙益が全くの虚偽ではなかったとわかるだろう。

【解】『清史稿』巻245の陳名夏伝によると彼は弘文院大学士と祕書院大学士に就いている。また「髪を残し衣冠を元に戻せば天下太平だ」と言ったことを謀反の証拠の一として弾劾された。彼は髪の発言は本当だが他の罪状は事実ではないと弁解している。

⑮　当時、蕭山の毛奇齢は南京が陥落するに際して平民でありながら西陵の戦闘に加わった。戦いに敗れ、山寺に逃亡して僧侶

となった。永暦六年、ある人が清軍によって彼を害そうとしたので、王士方と変名して山間地帯を転々とし、やっと逃れることができた。そして、斉、楚、梁、宋、鄭、衛をくまなく巡り、一万語を越える『続哀江南賦』を書いた。禹州を通過したとき、もとの懐慶王の邸に宿泊して、『白雲楼歌』を作った。そのことがしだいに北京の敵対者の耳に入って彼を陥れようとしたので、逃亡して泥小屋にかくれた。康熙の時に禁令が解除され、意外にも奇齢は制科でもって翰林院検討に就いた。呉世璠が死ぬと『平滇頌』を作り献上した。彼が少壮期は苦節を持し昔の烈士の趣がありながら、晩節を全うできずに蛮族に諂ったことが君子には残念だ。全祖望は学術をかりて彼を批判しているけれども、この理由だけのためにそういう弁論をしたのである。

【解】「西陵」は『明史』巻44、地理志、紹興府蕭山県の記述に「西には西興があり、西陵とも言う。銭塘へ行く者はここから川を渡る」とあり、銭塘は杭州府であるから蕭山から銭塘江を渡る渡し場である。今、西興は蕭山市ではなく杭州市区に入っている。

「続哀江南賦」は未見。庾信に倣ったのであろう。

「制科」は臨時の皇帝が実施する科挙だが、ここで言うのは康熙18年の博学鴻儒科である。『清史稿』巻268の毛奇齢伝による。

「平滇頌」は四庫全書本『西河集』巻一の冒頭に置かれている。下文に言及される「皇上神聖威武」の語は本文の最初にある。

全祖望の毛奇齢批判は徐注に示すように『鮚埼亭集外編』巻12「蕭山毛検討別伝」にあるが、反清軍参加や方国安らと反目して迫害されたことなどは「烏有」だとしている。章炳麟は事実としてここで記述している。全氏は毛が節義に反したことから学術も生涯もみな醜悪化している、と章氏は考えたのである。なお、銭穆『中国近三百年学術史』第六章ではここの章氏の記

述をほぼそのまま使っている。銭穆も事実と認めたことになるが、学術についての批判は全祖望を踏襲している。

⑯　このころから士大夫は競ってへつらいに全力を傾け、神聖という呼称が民間の記録にも溢れた。しかし、まだ戴名世、呂葆中、査嗣庭、汪景祺、胡中藻などがいて、満州王朝の召使いとして出仕しながら、随筆と詩の中ではしばしば攻撃の矢を放っていた。名世は明の最後の皇帝を共主に推戴していて意図は真心からだ。そのほか失職した恨みから作ったものもあるが、しかし侮蔑しているところをみると種族が基本的には同一ということがまだ明確である。乾隆中期以降は士人はどんどんあいまいになり、「変風」の風刺は途絶した。

【解】「変風」は邶風、斉風以後の国風を指す。徐注に引かれた「詩譜序」の前文に「衆国粉然。刺怨相尋」とあり、この傾向が変風にいたった、と言える。つまり変風に含む意味は風刺と怨みということになる。

⑰　章炳麟は言う。楊雄は静かに無欲であり、過去を振り返った。銭謙益は軟弱だったがまだ悔い改めた。顔之推が北周に敵対して陳に近づいたのは、梁の王朝を懐かしんだからだとわかる。長江以南の士人が種族のちがいを理解していたことは高く評価される。

【解】「知類」を徐注は、事物の類比を知ると解するが、前節の「種類」と同じであろうから種族のことを言う。

⑱　墨子は「売り買いが易である。消し即ち消。尽くすのが蕩である。」『経説上』。同じ種族が代わる代わる君主となるのが「易」であり、異民族が侵入して君主となるのが「蕩」である。蕩と易とどちらが悲劇か、当然誰にでもわかろう。

⑲　しかし、現在学者たちは満州族を排斥すると言いながら、短期間のうちに変質してしまう。清の道光年間に仁和の龔橙がいて、ある人が散館の試験で「正大光明殿賦」の問題を伝えたが、その韻は忘れてしまった。橙は「僕が知っている。『深い森林と茂った草原は獣の住むところ』だ」と言った。これこそ向こう見ずだが時節に適合していることではないか。後に漢語をハリー・パークスに教授し、そのブレーンとなった。円明園の火災では橙が一騎で兵隊の先をこして侵入し、宝石や国の宝物を取りだした。清軍が西洋の軍隊に援助を乞い蘇州、松江を陥落させ、洪秀全政府と長江下流とを分断したとき、橙は大いに参与した。世間ではみな彼の特殊能力を認めた。彼がヨーロッパと満州族とあっちこっち付いたり離れたりして、不満から望みをかなえようとするのを見ると、中国にとっては何の関わりがあろうか。近頃帰安の銭恂は十回郷試を受験し、合格できないので恨めしく思っていたが、外交使節に随行し、知府の職を得た。常々「同じ異民族なら、清に仕えるよりヨーロッパに仕えたい。政治と法律がきちんと整っているからだ」と言っていた。彼の発言は正しいようであるが、結局は不正であって、まさしく憤激を名目として権力と利益を求めようとする者ではないか。さらに異種族を排斥する目的は同族が自立するためであり、政治と法律は当然その次である。同じく異民族なら政治と法律が整頓されているかどうかはどちらでもよい。政治を重視して同族を軽んじたからこそ、昔から沙陀氏を高く、後梁を低く評価することになった。

【解】「人伝館試正大光明殿賦」は徐注で『曾国藩日記』をあげているが、探し当てられなかった。『曾国藩年譜』道光二十年四月十七日に同じ記事がある。出題された韻は「両を執り中を用い永図を懐う」であり、「長林豊草」とは韻があわないのではないか。

「狂而時中」未詳。

「巴夏礼」は Harry Smith Parkes、アロー号事件を作りだした。1865 年から日本公使であり、薩長方に協力したので著名である。

「右沙陀、左後梁」とは五代の後唐、後晋、北漢がみな沙陀氏であるのでこれらを言う。後梁の朱温が唐の昭宗と哀帝を殺害して建国したために、逆賊とされる。一方前篇で後唐の明宗が異民族でも優れた統治を実行した例が示された。そこで唐、晋、漢が高く、漢族の梁が低く評価されるのが普通になった。